

いわゆる「壁塗り代換」における動詞の条件

川野靖子

キーワード：壁塗り代換、格交替、位置変化、状態変化

要 旨

いわゆる「壁塗り代換」を成立させる動詞の条件について、従来の研究では「位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を備えた動詞が代換を成立させる」ということが指摘されている。しかし、この場合の「位置変化動詞としての側面」、あるいは「状態変化動詞としての側面」が指す具体的内容が明らかでないため、先行研究の規定だけでは代換可能動詞と代換不可能動詞を明示的に区別することができない。

本稿の目的は、代換可能動詞と代換不可能動詞の具体的な違いの分析を通じて、従来指摘されている「壁塗り代換」の成立条件をより明確化することにある。本稿では特に、状態変化構文に生起するが位置変化構文には生起しないタイプの代換不可能動詞と代換可能動詞の違いを分析し、代換可能動詞の持つ「位置変化動詞としての側面」の具体的内容について論じる。

1. はじめに

1.1. 目的

次の例に見られる現象は、一般に「壁塗り代換」と呼ばれる格の交替現象である。

- | | |
|------------------|--------------|
| (1) a. 壁にペンキを塗る | b. 壁をペンキで塗る |
| (2) a. グラスに水を満たす | b. グラスを水で満たす |
| (3) a. グラスに水が満ちる | b. グラスが水で満ちる |

(1)のa文において、「壁」は二格をとっているが、b文ではヲ格をとっている。また、a文においてヲ格をとっている「ペンキ」が、b文ではア格をとっている。し

かし、こうした格形式の違いにも拘わらず、(1a)と(1b)の表す基本的な内容はほとんど変わらない。(2)でも同様の現象が見られる。(3)は自動詞文に見られる代換現象である。自動詞文の代換では、a文で二格をとる名詞がb文でガ格をとり、a文でガ格をとる名詞がb文でア格をとる。

「壁塗り代換」はすべての動詞において成立するわけではなく、代換可能動詞は(1)～(3)に挙げた動詞を含む一部の動詞に限られている(塗る、満たす(満ちる)、散らかす(散らかる)、飾る、はる、巻く、あふれる、敷きつめる、等)。本稿ではこうした「壁塗り代換」を成立させる動詞の条件について論じる。

1.2. 問題の所在

「壁塗り代換」について論じた先行研究の多くは、「壁塗り代換」の二つの代換構文をそれぞれ位置変化構文と状態変化構文として位置づける点、及び代換可能動詞を「位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を備えた動詞」として位置づける点で、事実上、ほぼ一致した見解を示している(奥津1981、定延1993、安1996、川野1997、岸本2001等)。たとえば次の(4)における「満たす」のような動詞は、物等を容器等に移入することを表す位置変化動詞としての側面と、物等に移入することによって容器等を物で一杯の状態に変えることを表す状態変化動詞としての側面を持つ。そして位置変化動詞としての「満たす」は位置変化構文である(4a)を、状態変化動詞としての「満たす」は状態変化構文である(4b)をそれぞれ実現する。(5)における自動詞の「満ちる」の場合にもこれと同様のことが当てはまる。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) a. グラスに水を満たす | b. グラスを水で満たす |
| (5) a. グラスに水が満ちる | b. グラスが水で満ちる |

しかし、こうした「位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を持つ動詞が代換を成立させる」という先行研究の規定だけでは、「満たす(満ちる)」のような代換可能動詞と、次の(6)～(10)における「困う」「汚す(汚れる)」「入る(入る)」のような代換不可能動詞を明示的に区別することができない。

- | | |
|-----------------|------------|
| (6) a. *小屋に橋を困う | b. 小屋を橋で困う |
| (7) a. *服に泥を汚す | b. 服を泥で汚す |
| (8) a. *服に泥が汚れる | b. 服が泥で汚れる |

- (9) a. グラスに水を入れる b. *グラスを水で入れる
 (10) a. グラスに水が入る b. *グラスが水で入る

(6)～(8)において代換が成立しないのは、「囲う」「汚す(汚れる)」という動詞が状態変化動詞としての側面を持つのみで、位置変化動詞としての側面を持たないためということになる。また、(9)、(10)において代換が成立しないのは、「入れる(入る)」という動詞が位置変化動詞としての側面を持つのみで、状態変化動詞としての側面を持たないためということになる。しかし、「満たす(満ちる)」に位置変化動詞としての側面があり、「囲う」「汚す(汚れる)」に位置変化動詞としての側面がないと言えるのは、どのような基準によるのか。同様に、「満たす(満ちる)」に状態変化動詞としての側面があり、「入れる(入る)」に状態変化動詞としての側面がないと言えるのは、どのような基準によるのか。この点が明らかにされない限り、「壁塗り代換」の成立条件が厳密な意味で導かれたことにはならない。

「壁塗り代換」の成立条件を明示的なものにするためには、代換不可能動詞と代換可能動詞の具体的な違いを分析して、代換可能動詞の持つ「位置変化動詞としての側面」、および「状態変化動詞としての側面」がそれぞれどのようなものであるかを具体的に規定することが必要となる。このうち本稿では、「囲う」「汚す(汚れる)」のような位置変化構文に生起しないタイプの代換不可能動詞と代換可能動詞の違いを分析し、代換可能動詞の持つ「位置変化動詞としての側面」の具体的な内容について論じる^{*1}。

2. 分析対象

代換可能動詞(位置変化動詞の側面と状態変化動詞の側面を持つ動詞)と代換不可能動詞(ここでは、状態変化動詞の側面のみを持つ動詞)の違いに関する具体的な議論に入る前に、本稿の分析対象となる状態変化構文のタイプについて述べる。以下に「壁塗り代換」の状態変化構文の例を挙げる。

- (11) 壁をペンキで塗る (= (1b))
 (12) グラスを水で満たす (= (2b))

*1 代換可能動詞の「状態変化動詞としての側面」に関する議論は川野1997を参照のこと。

- (13) グラスが水で満ちる (= (3b))

(11)~(13)からわかるように「壁塗り代換」の状態変化構文にはア格句が現れるが、このア格句は次の(14)、(15)におけるア格句のような、「道具」を標示するア格句とは異なるものである。

- (14) 窓ガラスをハンマーで割る

- (15) 紐をはさみで切る

「壁塗り代換」に現れるア格句と「道具」のア格句の違いは、次のような現象から確認することができる。第一に、「壁塗り代換」のア格句が(13)のような無意志的变化を表す自動詞文に問題なく生起するのに対し、「道具」のア格句は無意志的な変化を表す自動詞文に生起した場合、不自然さを伴う。

- (16) ?窓ガラスがハンマーで割れる (無意志的变化) cf. 窓ガラスが割れる

- (17) ?紐がはさみで切れる (無意志的变化) cf. 紐が切れる

- (18) 太郎が車で学校に行く (意志的变化)

第二に、(18)のような「道具」ア格句の生起した変化自動詞文は、テイル形で結果継続の解釈を実現しない。これは「壁塗り代換」の状態変化構文^{*2}がテイル形で結果継続の解釈を実現するのと対照的である。

- (19) 太郎が車で学校に行っている (+結果継続)

cf. 太郎は(朝から)学校に行っている (結果継続)

- (20) グラスが水で満ちている (結果継続)

以上の点から、「壁塗り代換」のア格句は「道具」のア格句とは異なると言える。

ところで、「道具」のア格句は意志的な運動を表す多くの動詞と共に共起可能であり、「塗る」のような代換可能動詞とも共起し得る。しかしその場合には代換が成立しない。

*2 ここでは代換可能自動詞を述語とする状態変化構文を指す。

- (21)a. *壁に刷毛を塗る b. 刷毛で壁を塗る
 (22)a. *バケツにひしゃくを満たす*³ b. ひしゃくでバケツを満たす*⁴

(21)、(22)が示すように、述語が「塗る」「満たす」のような代換可能動詞であっても、状態変化構文に現れるア格句が「道具」のア格句である場合には代換が成立しない。そのため本稿では、「道具」のア格句を含む状態変化構文を分析対象から外すこととする⁵。

3. 代換可能動詞の条件

本節では代換不可能動詞(ここでは、状態変化構文にしか生起しない動詞)と代換可能動詞の具体的な違いを分析し、代換可能動詞の条件を提示する。

3.1. 存在のあり方の指定

「壁塗り代換」を成立させる動詞には次のようなものがある。

- | | |
|---------------------|-----------------|
| (23)a. グラスに水を満たす | b. グラスを水で満たす |
| (24)a. グラスに水が満ちる | b. グラスが水で満ちる |
| (25)a. 床に絨毯を敷きつめる | b. 床を絨毯で敷きつめる |
| (26)a. 壁にポスターをはりつくす | b. 壁をポスターではりつくす |
| (27)a. 壁に青い壁紙をはる | b. 壁を青い壁紙ではる |
| (28)a. 壁にペンキを塗る | b. 壁をペンキで塗る |
| (29)a. 腕に包帯を巻く | b. 腕を包帯で巻く |
| (30)a. 部屋に紙くずを散らかす | b. 部屋を紙くずで散らかす |
| (31)a. 部屋に紙くずが散らかる | b. 部屋が紙くずで散らかる |

*3 (22a)は「バケツの中にひしゃくを入れる」という読みであれば解釈可能かもしれないが、「ひしゃくを使ってバケツの中に何かを入れる」という読みでは解釈できない。

*4 (22b)は、「ひしゃくを使ってバケツを何か(水など)で満ちた状態にさせる」という状況を表す。

*5 Fukui et al. 1985では、「壁塗り代換」に現れるア格句をMaterialとして、Instrumentのア格句と区別している。また Iwata 2000では、英語の locative alternation に現れる with-phrases を Instrumental with-phrases と区別する必要があると論じている。

(32)a. 壁に花を飾る

b. 壁を花で飾る

一方、「濡らす(濡れる)」「湿る」「染める(染まる)」「汚す(汚れる)」のような動詞は位置変化構文に生起せず、代換を成立させない*6。

(33)a. *布に水を濡らす

b. 布を水で濡らす

(34)a. *布に水が濡れる

b. 布が水で濡れる

(35)a. *シャツに汗が湿る

b. シャツが汗で湿る

(36)a. *床に血を染める

b. 床を血で染める

(37)a. *床に血が染まる

b. 床が血で染まる

(38)a. *服に泥を汚す

b. 服を泥で汚す

(39)a. *服に泥が汚れる

b. 服が泥で汚れる

(23b)～(32b)の状態変化構文と、(33b)～(39b)の状態変化構文を比べてみると、後者に見られない前者の特徴として、「運動完了時の、デ格句の実体の存在のあり方が指定されている」という点が抽出される。たとえば(23b)～(27b)はいずれも運動完了時にデ格句の実体がヲ格句(ガ格句)の実体のスペース全体を埋め尽くす形で存在する状況を表しており、次の例が示すように、「ガラスの途中まで水が入っている」、「壁の一部分にポスターがはってある」といった解釈を許さない。

(40) |水をふちまで注いで/*水を半分まで注いで|、グラスを満たした

(41) 壁を|たくさんのポスターで/*一枚のポスターで|はりつくした

また(28b)や(29b)も、(23b)～(27b)の場合ほど絶対的な解釈ではないが、「運動完了時にデ格句の実体がヲ格句の実体のスペース全体を埋め尽くして存在する」とい

*6 (34b)、(35b)、(37b)、(39b)では、デ格句が無意志的变化を表す自動詞文に問題なく生起している。またこれらの例は、テイル形で結果継続の解釈を実現する。

(i) 布が水で濡れている(結果継続)

(ii) 服が泥で汚れている(結果継続)

したがってこれらの例に生起しているデ格句は「道具」のデ格句ではないと判断される。

う解釈を持ちやすい*7。

運動完了時のア格句の実体の存在のあり方に関する指定は、(30b)～(32b)にも見られる。(30b)や(31b)では、ヲ(ガ)格句「部屋」が散らかった状態になるには、ア格句「紙くず」が乱雑に拡散した状態で「部屋」に存在する必要がある。(32b)でも同様に、ア格句「花」はヲ格句「壁」が美しく見えるような状態で配置される必要がある。

一方(33b)～(39b)は、ア格句の実体の存在のあり方に関して、基本的に無指定である。(33b)～(39b)の表す事態は、運動完了時にア格句の実体がどのようなあり方で存在するかに関わらず成立する。たとえば(33b)の表す事態は、「水」が「布」の一部に存在するか全体に存在するかといったことに拘わらず成立する。

(42) |水を一滴たらしして/水を全体にたらしして|、布を(水で)濡らした

また(38b)の「汚す」は「散らかす」と同様、ヲ格句の実体が汚い状態に変化することを表すが、「散らかす」がア格句の実体に対し「運動完了時に拡散した状態で存在する」という指定を持っていたのに対し、「汚す」はこうしたア格句の実体の存在のあり方に関する指定を持たない。

(43) |泥を点々とはねかけて/袖口に泥を付けて|、服を(泥で)汚した

以上の議論から、代換可能な動詞(位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を持つとみなされる動詞)の条件は以下のように規定される。

(44) 状態変化構文に生じる動詞のうち、運動完了時のア格句の実体の存在のあり方を指定する動詞が、代換を成立させる(状態変化動詞としての側面だけでなく位置変化動詞としての側面を持つとみなされる)。

*7 ただし(27)～(29)のa文は、「運動完了時にヲ格句の実体(「青い壁紙」「ペンキ」「包帯」)がニ格句の実体の一部に存在する」という読みで解釈することが十分可能である。詳しくは川野1997を参照のこと。

3.2. 大小関係

状態変化構文に生起する動詞の中には、(44)の条件を満たすにも拘わらず代換を成立させないものがある^{*8,9}。

- | | |
|-----------------------|------------------|
| (45)a. *壁の穴にセメントを塞ぐ | b. 壁の穴をセメントで塞ぐ |
| (46)a. *壁の穴にセメントが塞がる | b. 壁の穴がセメントで塞がる |
| (47)a. *壁のしみにポスターを隠す | b. 壁のしみをポスターで隠す |
| (48)a. *壁のしみにポスターが隠れる | b. 壁のしみがポスターで隠れる |
| (49)a. *小屋に柵を囲う | b. 小屋を柵で囲う |
| (50)a. *菓子里に紙を包む | b. 菓子里を紙で包む |
| (51)a. *荷物に風呂敷をくるむ | b. 荷物を風呂敷でくるむ |

(45b)、(46b)では、運動完了時にア格句「セメント」がヲ(ガ)格句「壁の穴」を埋め尽くす形で存在する必要がある。(47b)、(48b)では、運動完了時にア格句「ポスター」がヲ(ガ)格句「壁のしみ」を覆い尽くす形で存在する必要がある。また(49b)～(51b)では、運動完了時にア格句「柵」「紙」「風呂敷」がヲ格句「小屋」「菓子里」「荷物」の周り全体を取り巻くような形で存在する必要がある。

「満たす」「塗る」等の代換可能動詞は、運動完了時のア格句の実体の存在のあり方を指定する点では、上の「塞ぐ(塞がる)」「隠す(隠れる)」「囲う」「包む」「くるむ」等の動詞と共通していることになる。しかし一方で、代換可能動詞を述語とする状態変化構文には、(45b)～(51b)の状態変化構文には見られない次のような特

*8 (46b)、(48b)ではア格句が無意志的变化を表す自動詞文に問題なく生起している。またこれらの自動詞文の例は、テイル形で結果継続の解釈を実現する。

(i) 壁の穴がセメントで塞がっている (結果継続)

(ii) 壁のシミがポスターで隠れている (結果継続)

したがってこれらの例に生起しているア格句は「道具」のア格句ではないと判断される。

*9 (45)～(51)のような代換不可能動詞のうち、「隠す(隠れる)」「包む」「くるむ」は「壁塗り代換」とは異なる次のような格交替現象を成立させる。

(i) a. 雲に月が隠れる b. 月が雲で隠れる

(ii) a. 紙に菓子里を包む b. 菓子里を紙で包む

(iii) a. 風呂敷に荷物をくるむ b. 荷物を風呂敷でくるむ

こうした現象についての分析は川野1997を参照されたい。

徴がある。それは、代換可能動詞を述語とする状態変化構文では、運動完了時にア格句の実体が占める空間とヲ(ガ)格句の実体が占める空間の大小関係に関して、「ア格句の実体の占める空間 \leq ヲ(ガ)格句の実体の占める空間」という関係が成り立つという点である。たとえば「部屋を紙くずで散らかす」では、「紙くず」の量は「部屋」の容量におさまるものでなくてはならない。また「グラスを水で満たす」では、「水」の量が「グラス」の容量と同程度と考えるのが普通であり、「水がグラスの外まで溢れ出て存在している」という解釈は成立しない。同様に「壁を壁紙ではる」や「壁をペンキで塗る」、「腕を包帯で巻く」でも、「壁紙」「ペンキ」「包帯」が「壁」や「腕」からはみ出した状態で存在するという解釈は成立しない。このように、代換可能動詞は運動完了時にア格句の実体の占める空間がヲ(ガ)格句の実体の占める空間内におさまることを指定する。

一方(45b)～(51b)の状態変化構文では、代換可能動詞を述語とする状態変化構文の場合とは逆に、運動完了時にア格句の実体とヲ(ガ)格句の実体がそれぞれ占める空間に関して、「ア格句の実体の占める空間 \geq ヲ(ガ)格句の実体の占める空間」という大小関係が成り立っている。たとえば(45b)、(46b)は、「セメント」が「壁の穴」にすっぽり収まっているか、あるいは外まではみ出しているという状況を表す。(47b)や(48b)では、運動完了時に「ポスター」が占める面積が「壁のしみ」の面積以上である必要がある。また(49b)～(51b)は、「柵」「紙」「風呂敷」が「小屋」「菓子」「荷物」の周囲をびったり覆っているか、またはある程度の間隔をおいて外側からとり囲んでいる状況を表す。このように「塞ぐ(塞がる)」「隠す(隠れる)」「囲う」「包む」「くるむ」等は、運動完了時にア格句の実体の占める空間がヲ(ガ)格句の実体の占める空間以上の大きさであることを指定する^{*10}。

以上の議論から、代換可能動詞(位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を持つとみなされる動詞)は(44)の条件に加え、次のような条件を満たした動詞であると規定される。

*10 川野1997では、状態変化構文「テーブルを布で覆う」の代換形「テーブルに布を覆う」が、人によって許容されない場合があると述べた。これは、「覆う」が(45b)～(51b)の「隠す」、「包む」等の動詞と同様に、「ア格句の実体(布)の占める空間 \geq ヲ格句の実体の占める空間(テーブル)」という大小関係を指定することに起因すると考えられる。

- (52) 状態変化構文に生起する動詞のうち、運動完了時にア格句の実体とヲ(ガ)格句の実体がそれぞれ占める空間に関して「ア格句の実体の占める空間 \leq ヲ(ガ)格句の実体の占める空間」という大小関係を指定する動詞が代換を成立させる(状態変化動詞としての側面だけでなく位置変化動詞としての側面も持つとみなされる)。

4. 条件の背景

3節では状態変化構文に生起するが位置変化構文には生起しないタイプの代換不可能動詞との比較から、次の二つの条件を満たす動詞が代換を成立させると論じた。

- (53)①状態変化構文において、運動完了時のア格句の実体の存在のあり方を指定する。
②状態変化構文において、「ア格句の実体の占める空間 \leq ヲ(ガ)格句の実体の占める空間」という大小関係を指定する。

多くの先行研究が指摘しているように、「壁塗り代換」を成立させる動詞は位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面の両方を備えた動詞であると考えられる。①のようにア格句の実体の存在のあり方を指定するということは、その動詞がア格句の実体(=位置変化構文におけるヲ(ガ)格句の実体)の位置変化に注目する動詞であることを示すと考えられるから、①は代換可能動詞の条件として妥当であると言える。

また②の条件の妥当性は、位置変化構文における「所在性の確立」という観点から支持される。位置変化構文について和気2000は「典型的な位置変化構文の場合、空間の広がりの中で、移動の到達点となるべきモノの位置が特定されていなければならない(地点性の要求)、さらに、移動の完了時に、「地点性」によって特定された地点内に移動主体が存在できる必要がある(所在性の要求)(p.74)」と述べ、典型的な位置変化構文では「地点性」と「所在性」の確立が必須であると論じている。②の示す、状態変化構文における二つの実体の占める空間の大小関係をそのまま位置変化構文に置き換えると、「ヲ(ガ)格句の実体(=位置変化物)の占める空間 \leq 二格句の実体(場所)の占める空間」という大小関係が成り立つことになる。位置変化物と場所がこのような大小関係にあるということは和気2000の指摘する「所在性の確立」につながる。

5. まとめ

本稿では状態変化構文に生起するが位置変化構文に生起しないタイプの代換不可能動詞との比較から代換可能動詞の特徴を抽出し、代換可能動詞の条件(その動詞が位置変化動詞としての側面を持つとみなされる条件)を(53)のように提示した。

従来の研究では、「位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を備えた動詞が代換を成立させる」という指摘はなされているものの、どのような動詞が「位置変化動詞としての側面(あるいは状態変化動詞としての側面)を備えている」と言えるのかに關しての議論がほとんどなされてこなかった。代換可能動詞と代換不可能動詞の違いを具体的に示した本稿の分析により、「壁塗り代換」の成立条件をより明確化することができたと考える。

参考文献

- 安平篤(1996)「自動詞文の格の代換について —「発生」と「移動変化」をめぐる、「あふれる」を中心に—」『日本語と日本文学』23: 13-22
筑波大学国語国文学会
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127: 21-33
- 奥津敬一郎(1983)「変化動詞文における形容詞移動」『副用語の研究』317-339
明治書院
- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」『筑波日本語研究』2: 28-40 筑波大学文芸・言語研究科
日本語学研究室
- 岸本秀樹(2001)「第4章 壁塗り代換」『日英対照 動詞の意味と構文』100-126
大修館書店
- 定延利之(1993)「深層格が反映すべき意味の確定にむけて—対称関係・対称性を利用して—」『日本語の格をめぐる』95-137 くろしお出版
- 堀川智也(1993)「二格名詞の結果を表す「結果の副詞」について」『日本語教育』80: 115-124
- 松本曜(2000)「日本語における他動詞／二重他動詞ペアと日英語の使役交替」『日英語の自他の交替』167-207 ひつじ書房
- 宮島達夫(1972)「動詞の意味・用法の記述的研究」秀英出版

- 森田良行(1982)「動詞「囲む」の提起する意味論上の問題—意味規定の条件の移行について—」『木村宗男先生記念論文集』105-120 早稲田大学語学教育研究所
- 矢澤真人(1983)「情態修飾成分の整理 —被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察—」『日本語と日本文学』3: 30-39 筑波大学国語国文学会
- 矢澤真人(1993)「いわゆる「形容詞移動」について」『小松英雄博士退官記念国語学論集』682-667 三省堂
- 山中信彦(1984)「場所主語文型・場所目的語文型と意味論的要因」『国語学』139: 43-53
- 和気愛仁(2000)「二格名詞句の意味解釈を支える構造的原理」『日本語科学』7: 70-94
- Dowty, David(1991) Thematic Proto-Roles and Argument Selection. *Language* 67: 547-619.
- Fukui, Naoki, Shigeru Miyagawa, and Carol Tenny(1985) Verb Classes in English and Japanese: Case Study in the Interaction of Syntax, Morphology and Semantics. *Lexicon Project Working Papers* #3. Center for Cognitive Science, MIT, Cambridge, MA.
- Iwata, Seizi(2000) Locative Alternation and Two Levels of Verb Meaning. Manuscript, Gifu University.
- Kageyama, Taro(1980) The Role of Thematic Relations in Spray Paint Hypallage. *Paper in Japanese Linguistics* 7: 35-64.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav(1991) Wiping the Slate Clean: A Lexical Semantic Exploration. *Cognition* 41: 123-151.
- Levin, Beth(1993) *English Verb Classes and Alternations*. The University of Chicago Press.

【付記】

本稿の内容に関して岩田彩志先生(岐阜大学)より有益なコメントを頂いた。ここに記して感謝申し上げたい。ただし言うまでもなく本稿での不備、誤りは筆者に帰せられるものである。

(2001年6月28日 受理)